



歴史に学ぶ——

## 小説・ミュージカルになった百婆仙

陶器市も無事終了し、大型連休の最終日となった5月8日に有田町文化体育館に、800人の方が、劇団わらび座のミュージカル「百婆」を観劇しました。(翌9日には町内の小中高校生が1500人観劇)

実に素晴らしい演技で、演劇の終る頃には感動で涙が出ました。さすがに「わらび座」です。出演者の熱気に打たれ「元気」をいただきました。劇団「わらび座」にお礼を申し上げたい。そして公演に当り裏方をお務めの皆さま本当にご苦労さまでした。また日韓友情年2005年にふさわしい企画でした。

この「百婆」は作家・村田喜代子先生の「龍秘御天歌」をもとにしたものです。ミュージカルのあらずじを紹介しましょう。

亭主である辛島十兵衛が死んだ。

故郷(朝鮮半島)を離れ、散々苦勞して日本で初めて登り窯「龍窯」を築いて、藩主が將軍家に献上できる立派な磁器が焼き上がるまでにした亭主が死んだ。

息子・親戚・一族郎党が寄り集り「辛島十兵衛にふさわしい葬儀を出さずばなるまい」と衆議一致したときに異様な声が出て、十兵衛の妻である「百婆」が白髪の頭を振り乱して屋根にまたがり、北の方角に向って、すっきりと立ち、左手に亭主の着ていた白衣を高くかかげて「ハクセン、チンチョン、チャンシ、かえれー」と叫びます。

(チンチョン生まれの百姓のチャンさんの魂よ還ってこいの意味)

百婆は苦勞を共にしてきた亭主・辛島十兵衛をクニのやり方で葬ると宣言し、息子たちは大慌てします。

百婆はクニの葬儀をしたいし、息子たちは日本で生きていくのだから日本の葬儀の方法をとりたいと大騒ぎになるのです。

ミュージカルはユーモアたっぷりに意外な展開をしていきます。(有田町公演実行委員会のチラシ参照)

皆さんもご存知のように有田焼の陶祖・李参平と共に宗伝(ミュージカルでは辛島十兵衛)の妻・百婆仙は陶磁器創成期のかけがえのない人です。

百婆仙について有田町史や色々の資料を調べてみました。

「肥前陶磁史考」では内田村(現在の武雄市)より960人を引連れて稗古場(有田町4区)に窯を築いたとあります。

「西松浦郡誌」によれば、宗伝は日本に帰化してより深海新太郎といい、内田村陶工の祖であり元和4年(1618)10月に没した。その妻子が泉山で磁石発見の情報を得て稗古場に移り住んだ。これが深海製陶の始祖であるとして書いてあります。

「有田町史」には陶業編Ⅰ、通史編に紹介されていますが、その根拠となったのは報恩寺(有田町稗古場)境内にある「萬了妙泰道婆之塔」の碑文です。その碑文によれば故宗伝の妻が同族の工人を連れて稗古場で開窯した。宗伝の妻の顔形が温和でゆったりとしていたので孫たちが敬愛して「百婆仙」と呼んだと書いてあります。

その当時960人もの工人を連れて来たのが事実であれば百婆仙のリーダーシップはすごいですね。どうも百婆仙が死亡したのが96才ですから、これを960と読み違えた懸念もあります。

リーダーシップに必要なことは「智・仁・勇・寛」です。「智」とは洞察力、「仁」は心の温かさ、「勇」とは決断力、「寛」とは包容力です。

それに960人もの人達の異動を認めたお役人や地元・稗古場の皆さんの包容力の素晴らしさに感服します。(現在の稗古場の人口は190人です。如何に大きな異動であったか想像できるでしょう。)

百婆仙は明暦2年(1656)3月10日に亡くなります。来年が没後350年になるのではないのでしょうか。そして報恩寺にある「萬了妙泰道婆之塔」が宝永2年(1705)に建立されていますので今年で300年になります。

話は戻りますが、劇団わらび座による「百婆」は有田を振り出しに九州各地、そして全国各地で明年3月まで120公演される予定です。有田焼の始祖「百婆仙」を全国に紹介していただく、有難いことです。

皆さん、さわやかな初夏の季節となりました。有田焼の今日をもたらした報恩寺の「萬了妙泰道婆之塔」や稗古場古窯跡を訪ね、黙々として作品制作に打ち込んでいる窯元との語らいで、有田の素晴らしさを味合ってみませんか。(久富 桃太郎)

季 刊

皿

山

2005  
夏

No.66

有田町歴史民俗資料館・館報



# 平成の皿山職人像

## ろくろ細工職人・村島昭文さん

シリーズで紹介している職人さんですが、第五回は伊万里・有田焼伝統工芸士でもある、ろくろ細工職人(シャークニン)の村島昭文さん(69歳)です。



焼物作りでの花形といえはろくろを使って成形する職人である細工人で、有田ではシャークニンと呼びならわす職人さんではないでしょうか。

昭和10年生まれ、の村島昭文さんは荷師だった父から、これから有田で生きていくには細工人になるのが一番と勧められ、15歳の時からこの道に入りました。もともと手仕事が好きで、最初は白川の有田高等青年実業学校の跡地にあったろくろ研究所に入りました。本来2年間の履修予定が、戦後の混乱の中、入所後1年で研究所自体が閉鎖され、一年間の研修を受けた時点で終了となりました。

その後、いくつかの窯元を経て深川製磁株式会社へ入社。在職40年の多くを先々代社長の深川進さんの元で働きました。当時の社長は窯場に毎日顔を出し、デザインを考え、削り終わった製品をなで廻して「もうひとかなー」、つまりもう一度カンナでの仕上げを施すように指示していました。当時は親方(社長)が職人を育てた時代でもありました。

この仕事をする中で最も嬉しかったのは、村島さんのことを「深川始まって以来の細工人」といった深川進社長の言葉を人づてに聞いたときでした。

入社2年目からは大物作りに挑戦するため、週に一回泉山にあった有田陶磁器技術員養成所に通い、その後も当時大物ろくろ細工の名人といわれた初代奥川忠右衛門さんに指導を受けるため、会社での仕事を終え

た後、岩谷川内にあった工房に3年間通いました。大物を作るときはくるまつぼに入って、細工人の足元で「かがみの送り回し」という仕事をしました。「かがみ」とはろくろの円盤状のところをいい、細工人の手の動きを見ながら回す速さを加減します。

この時師匠は何も教えてはくれません。ただ、その手先を見ながら、時には早さが合わずに足で蹴られながら技を身に付けていくしかありません。しかし、この修業があつて初めて、一人前の職人としての技を身に付けたと村島さんはいいます。

有田での丸もの細工は伝統的に足で蹴って回す蹴ろくろを使ってきました。成形する時は右足で前に蹴り出す左回り、削りの時はその反対の右回りが一般的でした。「蹴って作らーじゃー」と言っていた進社長のもとで15年間は蹴ろくろを使い、社長の死後2年ほど経ってからベルト、つまり動力で動かすようになったそうです。

以前、ろくろ細工には窯場の違いから内山流儀と外山流儀があつたと村島さんはいいます。その違いはヘラを当て手を動かす手順にあり、内山の方がひと手間多かつたそうです。つまり、工程の回数が内山が4あるとすれば、外山は2か3ぐらい。内山では主として美術品を、外山では数をこなさなければならないのでおのずとそういう作風になったのではないかということでした。

有田焼の伝統を引き継いでいくということは、先人の並々ならぬ労苦と努力、さらには各時代の創意工夫があつたことはいまでもないことです。しかし、長年ろくろ職人として生きてきた村島さんは、有田焼の現状を危惧しています。今こそ陶芸作家だけではなく、本物が作れる職人が必要であるといいます。そのためには時間はかかるが基礎をしっかり身に付け、職人としての仕事を覚えることだといいます。「ろくろ一つ回すことで、碗・鉢・水差し・花瓶などさまざまな形の器が、数も自在に作れるようになる。石膏型もいいが、これを使うと数をこなさなければならない。しかし、有田は本来、少数多品種が売りだったのだから、細工人を育てるほうが有田の製品を作るのに適している」

初代忠右衛門さんは「作ればよかとじゃなか、品のある焼き物ば作らんば」というのが口癖だったそうです。「師匠を追い越して初めて恩返しができるのだが、今の人は昔の名人技を見たことがないしそれも不幸だ」と、古希を迎えた村島さんは現在も、退職後に自宅前に開いた工房で通ってくる若い人々を指導し、職人の育成を続けています。



# おめでとう!! 日本一

## 佐賀県立 有田工業高等学校の快挙

有田町には「アリコウ」という愛称で馴染みの深い佐賀県立有田工業高等学校があります。セラミック科、デザイン科、機械科、電気科の4つの学科があり、現在683名の在校生がいます。

このほど、明治33年に開校して105年の歴史を持つ有田工業高等学校が、全国の工業高等学校を対象とした標準テストで全国一位となる快挙を成し遂げました。

このテストは全国工業高等学校長協会が、専門科目の学力を把握することなどを目的として、年一回開催しているものです。機械、電気関係などの9科目があり、今年2月に行われたテストは一年生対象に264校、二年生対象に186校が受験しました。その中で有田工業高等学校は一年生38人が受験し、百点満点の平均点が98.4点。二年生の受験者は40人で平均点は98.3点でした。

実は一昨年度のテストでも、全国二位の成績を取っていて、有田工業高等学校の実力はかなりのレベルに達しているのです。これは生徒の奮闘もさることながら、教育する先生方の努力も並々ならぬものがあっての「日本一」獲得だったといえるのではないのでしょうか。

### 【有田工業高等学校と勉脩学舎】



県立有田工業高等学校に保存されている扁額

明治という時代になって間もないころ、明治5年に旧小城藩士・江越礼太を招聘して白川学校が開校しました。彼は多久や長崎で学問を修めたのち、そのころ

は伊万里・山代で経綸舎という塾の塾頭をしていました。そこでは後に電気分野で日本最初の博士となり、帝国大学電気学科の初代日本人教授となった志田林三郎（多久）や同じく工学博士中野初子（小城）、応用地質学を開拓して理学博士となった巨智部忠承（長崎）など各地から学生が集い、有田からも志のある若者が学んでいました。その名声を聞き付けた有田皿山のリーダーたちの要請を受け、江戸時代皿山代官所であった場所に学校が開設されました。

その後、明治14年(1881)、江越はわが国最初の陶磁器工芸学校・勉脩学舎を開校します。有田工業高等学校の歴史はこの勉脩学舎に、その端を発しています。学校設立の目的は有田焼の次代をになう若者の育成にありました。当時の有田がとかく伝統によりかかり、有田焼固有の美を失いつつあることを指摘し、「西洋の技や理教に学び、その長をとり、わが不足を補うことによって名工を育てる」ために、絵画・製陶技術・窯業術の教科を取り入れました。しかし、残念ながらその理念は実を結ぶことがありませんでした。明治28年、香蘭社社長・九代深川栄左衛門が大隈重信に宛てた書簡には「数十年前先輩有志者之発起にて勉脩学舎なる実業学校設備相成、其際過分の御寄付迄頂戴罷在候處、時機至らざりしか直ちに中止の姿に相成居候」とあるように、町内外の関係者の期待を担いながらも時期尚早だったのでしょいか、ほどなく閉校となってしまいます。

現在、有田工業高等学校の応接室には有栖川 宮熾仁親王の書による「勉脩学舎」の扁額が保存されています。ちなみに、この扁額はもともと有田物産陳列館（現在の有田商工会議所の位置にあった建物）にあったらしく、昭和2年12月9日付けの有田町役場日誌には「今度県立有田工業学校に移置」したことが記録されています。

勉脩学舎の建学の精神は明治28年開校の有田徒弟学校に引き継がれ、同33年に佐賀県工業学校有田分校となって、同36年には有田工業学校に昇格し、昭和23年に現在の有田工業高等学校になります。

時代の流れとともに、窯業中心だった学科も電気、機械の各科が加わり、平成16年までに送り出した卒業生の総数は15,367名で、日本を代表する陶芸家は勿論、各地で活躍する人材を輩出しています。今回の快挙はわが町の「アリコウ」が、まさに名実共に日本有数の学校であることを実証した事になると思います。

おめでとう、アリコウ！ おめでとう、日本一！



## 皿山ウォーキング・パートⅦ 開催

7回目となった恒例の皿山ウォーキング(教育委員会生涯学習課との共催)を5月17日(水)に開催しました。体力増進と共に有田の歴史も学ぶ一石二鳥の催しです。

今回の参加者は31名。生涯学習センターの前を出発して、桑古場から江戸時代の経済学者であり文人でもあった正司考祺旧宅を通り、猿川へ出るという内山コースの約3キロを歩きました。(正司考祺については前号を参照)

この道は江戸時代、長崎へ行く人、或は江戸や故郷に向かう人々が、正司家を訪れるためにたどった道でもあります。安政六年(1859)の「松浦郡有田郷図」にも描かれている家屋は長屋門を備え、今もほぼそのままの形で残っています。

また、道の途中には正司家歴代の墓地があり、そこにはちょっと変わった形の墓碑があります。亀の形をした台座の上に墓石がのっています。これは「亀趺」といって、中国や朝鮮半島で見られ、あちらから日本に伝わってきたといわれています。



正司考祺の墓

日本では江戸時代、各地の藩主や高貴な身分の人の墓に用いられています。正司家の墓地内には3基の「亀趺」がありますが、中でも最も古いものは正司考祺の墓で、安政4年(1857)に亡くなった際に建立されたものと思われます。



正司泰之さん(前方右から3人目)の説明を聞く参加者

今回は当主泰之さん(88歳)の特別の計らいで、旧宅に保存されている資料も見せていただきました。中林梧竹や篠崎小竹など著名な書家や儒学者の扁額などを見学し、その後、猿川地区の古窯跡を見ながら終点の文化体育館まで歩きました。

次回は秋に外山地区の探訪を予定しています。いにしへの有田をたどりながらのウォーキングです。次回も皆さんの参加をお待ちしています。



## 昔の陶器市

第102回有田陶器市も、109万人の来訪者があり大賑いでした。

私が幼いころ、おじいちゃん文久2年(1862)生まれ、おばあちゃん明治2年(1869)生まれから聞いた昔の陶器市を思い出しました。

“おじいちゃん、おばあちゃんが、まだ元気な頃はお廻路さんがネ、八十八ヶ所詣りで有田から黒髪山へ登っていたんだよ。それを見ていた窯元のおかみさんがザルに「やきもの」の端んばものとか、チョツとしたキズ物を盛って小遣いかせぎをしたのがネ、これが陶器市の始まりだったんだよ”と話しておられました。「やきもの」を作る人は仕事に集中し、その工場のおかみさんが、半端物やキズ物の売れたお金でダンゴ汁など作って仕事をしている人達にふるまっていましたヨとのこと。

この陶器市も明治29年(1896)に9代深川榮左衛門・田代呈一らにより桂雲寺で第1回陶磁器品評会が開かれ、この品評会に併せて深川六助・中島浩氣・徳見知敬らが李参平の陶祖祭と各陶器店の蔵ざらえをしたらどうかと打合せをします。その折に難色を示したのが中島浩氣です。陶器に埃が積ったのを洗って陶器市に出す為に「やきもの作りに専念している人を動員したらいけない」半端ものを売るのは、おかみさんや子供達ではないかというわけです。

陶器市も時代の流れと共に大きく変化しました。いつのまにやら、やきものを作る人も陶器市に動員されているやに聞いております。

たしかに消費者のニーズを確かめる為に、作る人が店頭立つのも一つの方法でしょうが、良いやきものを作る職人意識だけはしっかりもっていて欲しいと思います。良いやきものは、作品から語りかけてきます。今年には窯元の陶器市を述べましたが、陶器市も100回の節目を過ぎ、陶器市創成期の考えを思い出すのも必要かと考え一筆滴めました。

(久富桃太郎 昭和5年(1930)生まれ)

## 季刊『皿山』

通巻66号(平成17年6月1日)  
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1  
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185